



真ク・リトル・リトル神話大系 6₁/₂

New Tales of the Cthulhu Mythos

ラムゼイ・キャンベル編

国書刊行会



真ク・リトル・リトル神話大系

第6巻(下)

昭和58年10月25日印刷

昭和58年10月30日第1刷発行

1,800円——定価

セイユウ写真印刷株式会社——印刷

大日本製本株式会社——製本

著者——H・P・ラウクラフト 他

編集——ラムゼイ・キャンベル

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18 郵便番号170

電話 03-917-8287 振替東京5-65209

落丁本・乱丁本はおとりかえます

目次

Contents

角笛をもつ影 T・E・D・クライン……………7

アルソフォカスの書 ラヴクラフト & M・S・ワーネス……………73

蠢く密林 テビッド・ドレイク……………87

パイン・デューンズの顔 ラムゼイ・キャンベル……………125

作者紹介——ラムゼイ・キャンベル……………171

解説——那智史郎……………177

Black Man with A Horn <i>by</i> T. E. D. Klein.....	7
The Black Tome of Alsophocus <i>by</i> H. P. Lovcraft & M. S. Wanes.....	73
Than Curse The Darkness <i>by</i> David Drake.....	87
The Faces At Pine Dunes <i>by</i> Ramsey Campbell.....	125

本文イラストレーション——

楢

喜八

角
慎
作

ブックデザイン——神田昭夫

オーガスト・ダーレスの思い出に
本書は彼のアイデアだった

日本語版翻訳権独占
国書刊行会

©1983 Kokusho-Kankohkai

New Tales of the Cthulhu Mythos

edited by

Ramsey Campbell

Copyright © 1980 by

Arkham House Publishers, Inc.

First published 1983 in Japan by

Kokusho-Kankohkai

Japanese translation rights arranged

with Arkham House Publishers, Inc.

through The English Agency (Japan) Ltd.

角笛をもつ影

Black Man With a Horn

T・E・D・クライン

福岡洋一

訳



あの黒人——「消印のため判読不能」は魅惑的だった。ゼヒスナップ写真を撮っておかないと。

— H・P・ラウクラフト、一九三四年七月二十三日付

E・ホフマン・プライス宛の葉書

過去形で語られる一人称の物語には、本来どこか人をほっとさせるところがあるものだ。それが喚び覚ますのは、何の不安もなく書斎に安んじて、机を前にパイプをふかしつつ静かに物思いにふける語り手の姿、語られようとする物語がどのような内容のものであろうと、それは回想の色合いに影を落としこそすれ、実質的に語り手の現在を脅かすものではない。時制そのものが、そのことを物語る。「いま、わたしは、こうしてお話することができる。なんとか切り抜けられたからだ」と。

わたし自身の場合も、いまの説明がびたりとあてはまる——身のまわりの様子に関するかぎりでは。たしかにわたしは書斎とも呼べそうな部屋で腰をおろしている。ほんとうはただの小部屋だが、片側の壁には本棚が並んでいる。その上にはマンハッタンを描いた風景画、何年も前に妹が記憶を頼りに描いたものだ。机は折りたたみ式のブリッジ・テーブルで、これももとは妹のものだった。わたしの前には電動タイプライターがあり、支えがちょっと不安定だが、モーターの回転音が心地よい。わたしのうしろの窓から聞こえてくる聞き慣れた鈍い音は、古い冷房装置が熱帯の夜に負けてはならじと、健気にも孤軍奮闘している証である。窓の外の暗闇からかすかに聞こえる夜の物音も、やはり心を落ち着かせてくれているに違いない。椰子の葉に鳴る風の音、何を考えるでもない蟋蟀の声、隣家のテレビのこもった音、時おり通りかかる車が幹線道路のほうに向かい、ギアを入れ替えてこの家の前を走り過ぎる音……

ほんとうのところ家と呼ぶのもおこがましいほどのもの、漆喰仕上げの緑色をした平屋のバンガローが、幹線から数百ヤードのところ、九軒並んだうちの三軒目。目印になる特徴といってもせいぜいが前庭の、妹が前の家からこちらへ移した日時計くらい、それとぎざぎざになった小さな杭垣。これは隣から文句を言われるのも構わずに妹が立てたものだが、いまはずいぶん雑草がからみついてしまっている。

お世辞にもロマンティックな場面設定とはいえないのだが、普通ならば過去形での回想に浸る背景として、むしろ、しっくりくるかもしれない。「わたしはまだこうして生きている」と、声の調子を整えて語りかける。(小道具として欠かせないパイプだって、さっきからラタキアを詰めてくわえている)そうしてさらに、こう続ける。「もうすっかり終わった。わたしはどうか切り抜けたのだ」

危険が去ったことを前提に語れるのなら、これほど気楽なことはないだろう。ただ、わたしの場合にはあてはまりそうもない。わたしの体験がほんとうに「すっかり終わった」かどうかなど、誰にも断言できはしないのだ。もしわたしの懸念どおり、物語の最終章がこれからだとすれば、「うまく切り抜けた」などとうぬぼれるのは、哀れな思い込みとしか見えないであろう。

とはいえ、自分自身の死を想ってみても、わたしはさして恐ろしくてたまらないわけではない。ときどきこの小さな部屋が、あまりにも退屈になってしまふ。安物の柳細工の家具に、時代遅れの退屈な書物に、外から押し入ってこようとする夜の闇に飽き飽きしてしまふ……。そして前庭のあの日時計も、そこに書いてある莫迦げた言葉にも。へわれとともに齢重ぬべし……♪

いかにもわたしは時の流れとともに齢を重ねてきた。もとよりこの人生は、とるに足らぬものだったとも思える。ならばその終末も、やはりどうでもいいには違いないのだ。

ああハワード、貴方はきつとわかつていたのだらう。

あれだよ、あれ。旅ならではの経験ってやつは！

——ラヴクラフト、一九三〇年三月十二日

こうしてしたためているあいだにも、この物語が結末を迎えるとすれば、まちがいなくそれは不幸な私たちでやってくるのだらう。だが、事件の発端はそういう類いのものでは全くなく、かなり滑稽といったほうが適當なくらいで——実際、尻もちつきかけるわ、ズボンの折返しはびしょ濡れになるわ、吐瀉物の袋が落ちてくるわ、の盛りだくさん。

「とことんキバってこらえようとはしたんですよ」と右隣の老婦人が弁解がましく言っていた。「こう言っちゃなんだけど、あんまり怖かったもんですからね。肘掛けにしがみついて、歯の根っこまで齧みつぶすほどのよ。したらあなた、機長さんからラン・キ・ユ・だかのアナウンスがあったと思うと、すぐにそのあと後ろの方が持ちあがって、また落ちる、フワリ、ストン、フワリ、ストン、だもの」総入れ歯をむき出し、わたしの手首を叩きながら、「——こう言っちゃなんだけど、ほかにどうしようもなかったんですよ、ゲロ吐いちまうほかはね」

このばあさん、いったいどこでこんな言葉を覚えこんできたものやら。それをこんどはわたしに押しつけようというのだらうか？ ねっとりした手が、こちらの手首を押えつけていた。「でも、スーツのクリーニング代は払わせてもらいますよ」

「なに、かまやしませんよ。その前から汚れていたんですから」

「なんてステキな男性でしょ！」やはりわたしの手首を掴んだまま、そのばあさんは恥ずかしそうな上目

づかいでこつちを見た。白眼の部分は古いピアノの鍵盤の色になって久しいようだったが、まあ魅力的な腫といえないこともない。しかし息のにおいには閉口した。ペーパーバックをポケットにすべり込ませながら、チャームでスチューワーデス呼んだ。

その数時間前にも、もうひとつ別の口の災難に遭っていた。ヒースロー空港で、現地のラグビー部らしい団体（全員骨のボタンの付いたネイビー・ブルーのブレザーで統一している）に囲まれて機内に乗り込んだとき、うしろから誰かに押されて、中国人の乗客が昼食入れにしていた黒いボール紙の帽子ケースに蹴つづ躓づいてしまったのだ。その紙箱はファースト・クラスの座席に近い通路にはみ出たのである。なかに入っていた何か——家鴨料理のソースかスープリしきもの——がわたしの踵のあたりにはねかかり、床にねばねばした黄色い汁がたまった。ふりかえると、長身で逞しい白人の男の姿がどうにか捉えられた。エア・マレーのバッグを持ち、髭を伸ばしている。その髭があまり黒くて濃いので、なんだか無声映画の敵役みたいだった。役柄が役柄だけに礼儀など心得ぬらしく、わたしを肩で（スーツケースほども幅のある肩で）押しのけたなり、通路にひしめく乗客をかき分けていった。その頭がまるで風船のように天井に近いあたりを漂っていったが、客室の後ろのほうでふいに見えなくなった。男の通ったあとには糖蜜の匂いがし、たちまち少年時代の記憶が蘇った。誕生パーティーでかぶる帽子や、カラード・アンド・ボウザーの贈り物の包み、ディナーのあとでやってくる腹痛のことなど。

「ソーベリー・ソリなんとお詫びしてよいものやら」中国人探偵、チャーリー・チャンをちょっと賑らませたような小男が、あつという間に遠ざかってゆく男を恐ろしそうに見ながら言い、それから身体をふたつに折り曲げると、料理を包みのリボンで座席の下にかき寄せはじめた。

「気にしないで」とわたしは言った。

その日は誰に対しても優しい気持ちになれた。わたしには空の旅がまだもの珍しかったから。もちろんわが友ハワードなら（その週の講演でも紹介したとおり）「飛行機が事業として一般に使用されるようになるのを見たいとは思わない。ただでさえ気ぜわしくなりすぎた生活のスピードを、またむやみに加速するばかりじゃないか」というのが口ぐせだった。飛行機など「お上品な連中の気晴らしの道具」としか思っていなかった彼だが、二十年代に一度だけ機上の人となったことがあった。ただし、たった三ドル五十セントで済むほどの短い飛行だったのだが。小気味よいエンジン音や、高度三万フィートで食事する、ぞくぞくするような愉悅や、地球はやはり丸かったと、窓から自分の眼で確かめる機会を得た歓びなど、ハワードはどれだけ想像しえただろう？ どれひとつとして味わうことなく、彼は世を去った。惜しいことをしたものだと思う。

ところが、死してもなお、ハワードはわたしを打ち負かしたのだった……

スチュワードスの助けを借りて立ちあがりながら、そんなことをぼんやりと考えていた。こっちの膝のあたりの惨状を、彼女はその職務上気づかってくれてはいたが、ほんとうのところは多分、わたしが立ったあとに待ちうけている、座席の後始末のことを考えていたのだろう。「なんでこんなに滑りやすい袋を作るんだかね？」隣席のばあさんが悲しそうに訊いた。「こちらの紳士のスーツが台無しだよ。きちんとお世話してあげておくれよね」機が降下し、またもとに戻った。ばあさんは黄ばんだ目をぐるりと廻して言った。「またもどしちまいそうだよ」

スチュワードスに案内されて、機内中央部にある化粧室にむかって通路を進んだ。左側にいた蒼白い若い女が鼻に皺を寄せ、隣の席の男に笑ってみせた。わたしは苦虫を噛みつぶした顔で、ばつの悪さを隠そうとした——『こんな目に遭ったのはわしのせいじゃないぞ！』——が、あまりうまくいったとも思え

ない。スチュワードに手をとってもらうのは、べつにそんな必要もないが心地よかった。一歩進むたびにわたしは寄りかかる度合いを強めていった。前から思っていたことだが、七十六才にもなって、外見も年相応のおかげで得をすることなど、ほとんどありはしない——が、これはそのうちの貴重なひとつだった。スチュワードにちょっかいを出してみたくて欲求不満に陥ることはもうないかわり、腕に寄りかかることを覚えたというわけだ。わたしはなにか冗談のひとつも言ってみようかと目をやったが、やめることにした。スチュワードは何の表情も浮かべておらず、顔が時計の文字盤に見えたくらいだったからだ。「外でお待ちしますの」と、スチュワードは言い、滑らかな白いドアを引き開けた。

「それには及びませんがね」わたしは身体をしゃんと伸ばしてみせた。「ただ——できたら別の席を見つけてもらえませんか？ いえ、何もあのご婦人に文句があるわけじゃありませんよ。でも、あの婦人^{ひと}の昼食の身をこれ以上見せられたくありませんからね」

化粧室の中では、エンジンのうなりがいつそう大きく聞こえ、わたしと外のジェット気流や北極の風とを隔てるものは、ピンク色のプラスチックの壁一枚ではないかとさえ思われた。そして外の気流にはところどころ乱れがあるらしく、そこを突き抜けるたびに機体がごとごと音を立てながら持ちあがり、ちょうどどここの氷のうえを橋^{そり}で駆けぬけるのに似ていた。便所へのドアを開ければ、何マイルも下に地球が——灰色に凍りついた大西洋に氷山が牙をむいているのが見えるのではないかという気さえした。イギリスはすでにもう、千マイルもあなたに去っていた。

片手でドアの把っ手をつかんで身体を支えながら、香水入りのペーパー・タオルをホルダーから抜いてズボンを拭い、さらに何枚かをポケットに詰め込んだ。ズボンの折り返しには、ねとねとした中華料理がまだ残っていた。これがどうやら、あの糖蜜の匂いのもだったらしい。ペーパー・タオルで軽く叩いて